

ウガンダ留学レポート

農学部共同獣医学科3年 高橋唯人

参加動機

私が今回のウガンダ留学プログラムへの参加を希望した理由は、大きく分けて2つあります。1つ目は、国際的な視野を持つためにウガンダという異なる文化や環境に触れたいと思ったことです。私は留学における多様な考え方もつ人々との関わりや、プログラムでの様々な経験を成長の機会と考えていました。そのため、私は数日の留学ではなく、まとまった時間のとれる学生のうちに留学をしようと高校生の頃から考えていました。しかし、そのような試みもコロナなどの影響によって実現することができませんでした。また、今回の機会を逃すと研究室等が始まるため、2週間や3週間などのまとまった時間の取れる留学は難しいと思われました。以上のこともあって、コロナが収束し国際交流が再開した今しか機会がないと思い、今回の留学に参加しました。2つ目は、自分の将来の選択肢の開拓のためです。現在、私は獣医学科に在籍しています。獣医学科に入るまでは、臨床の獣医以外の選択肢はあまり考えていませんでした。しかし現在は、大学の講義などで紹介された野生動物と関わるような獣医としての道に興味を持っています。そのため、アフリカの自然公園での動物の見学は、将来の自分の職業選択の一助になるだろうと考え、今回の留学に参加しました。

学んだこと

今回の留学では非常に多くのことを学びました。そこで、学んだ内容をジャンルごとに分けて記載します。そして、学んだことについてどのように思い、どのように感じたかを合わせて記載します。

(1) 経済

経済については、ジャンル分けした中で最も自分の興味・関心が高く、最も多くの学びを得ることができたと考えています。また、経済という言葉には非常に多くの内容を包括しているため、相対的にマクロな経済として国家経済、相対的にミクロな経済として個人経済と大きく2つに分けました。

・国家経済

日本とウガンダの国家経済の比較からわかる大きな特徴としては「国家の借金」、「GDPに占める産業セクターの違い」が際立っていたように感じました。以後、それぞれについての詳細を記述します。まず、「国家の借金」については、借金の借入先と借金の金額が異なっていました。日本では、主に国債という形で国民から借金をすることができ、現在は約1286兆円（2023/12/31時点）の借金があり、これは国家のGDP比約260%となります。この260%という値は世界ランキング2位であり、1位のレバノンの280%に次ぐ値です。一方、ウガンダはGDP比約48%の借金を主に他国からしています。日本の途方もないような借金の金額は、国家としての信頼性と国民の経済的豊かさによって実現していると思いました。また、「GDPに占める産業セクターの違い」からは、付加価値労働生産性の低い農業セクターの割合が高いということがわかりました。

これらのことから、多くのウガンダ国民は経済的に豊かな状況とは言い難い状況です。このような状況で国家の成長を考えた際、どのような分野にどの程度の投資を行うことが効率的であるのかについて、ウガンダ留学中に多く考えました。まず国家の仕事として考えると、治安維持、富の再分配、行政機能、インフラ機能の維持、教育などを挙げることができます。もちろん全てに十分な資金や人的資源を投入することができるのであれば問題はないでしょう。しかし、先進国である日本でさえも、十分な資金や人的資源を投入できているとは言えない状況です。そのため、ウガンダ



はさらに厳しい状況にあると考えるのが妥当です。どの分野に対する投資がウガンダの成長に最も効果的であるかを考えた結果、「ウガンダには十分な職が少ないこと」、そしてその原因の一つになりうる「銀行への不信感」が成長の阻害要因になっていると考えました。

幸いにも今回の留学では、日中の時間帯にウガンダの首都であるカンパラの街中を見る機会に恵まれました。その際、大量のボダボダと呼ばれるバイクを活用したタクシーと、時間を持って余しているように見える人たちを多く見ました。これらの人を付加価値労働生産性という観点から見ると、生産性が低い人たちであるということになります。このような生産性の低い仕事しかないという状況は、新たな仕事が生み出されることで解決できるはずですが、しかしウガンダでは、創業時の資金確保先である銀行が、十分な役割を果たせていないという情報を多く見ました。そもそもウガンダ国民の銀行への信頼度が低い、ということも何度も伺いました。また、銀行の利子は25%程度であるとも伺いました。これらのことから、創業時に銀行から資金を確保することが難しいため、新たな仕事生まれず、労働生産性の低い現在の仕事を続けざるを得ない状況にあると考えました。

この解決策として、2つのアプローチを考えました。1つ目は、信頼感を得るために金銭に関する教育を取り入れることです。これには、教育を受けた世代が経済を引っ張る世代になるまで、時間がかかるというデメリットがあります。一方で、既存の教育というシステムに新たな手法を組み込むことで、現状の改善が可能となるメリットもあります。例えば、「経済学」の科目を導入する場合、新しい教員や教科書が必要となり大変です。そこで、最初は一度きりの授業としての扱いから始め、教科書ではなく金融の基礎などの授業内容をデータで送り、その内容を教育することから始めるというものです。これにより、授業を小さくより簡便に始めることができます。2つ目は、銀行への信頼感を人々に与えるために、一人一人が銀行口座を作るきっかけを与えるというものです。銀行口座を含めた銀行の利用状況について、今回の留学で把握できたわけではありません。しかし、ウガンダの人たちに銀行を使うきっかけを与えることによって、銀行を自分

ごととして感じ、理解することで信頼感を持ってもらえると思います。銀行口座を作るきっかけ作りに、多くの労力とコストがかかると想像がつきませんが、1つ目のアイデアと比べて相対的に効果が現れるまでの期間が短いと考えられます。

・個人経済

個人的に集めた情報の中で最も充実していたのが、この個人経済に関する情報でした。事前に調べた時には、この個人経済に関する情報を十分に集めることができませんでした。また、個人経済は国全体の経済の状況をわかりやすく観測できる部分であると考え、現地での情報収集に最も注力しました。

まず事実として、ウガンダは発展途上国です。そのため、日本よりも物価は相当安いという予想を立ててからウガンダ留学に参加しました。しかし、昨今の円安などの影響もあって、想定していたよりも物価が安くないこと、また場所によっては物価が高いということにとっても驚きました。物価を比較する上で、今回収集したウガンダでの給料のデータや物価のデータの一部は以下のようになりました(表1・2)。

ウガンダ人の給料

職業	月収	円換算 (1000UGX=40円)
銀行員	550,000 UGX	22,000 円
大学教授	2,000,000 UGX	76,650 円

ウガンダの物価

商品名	販売価格	販売箇所
500mlジュース	1,500 UGX	スーパー
同一商品	8,000 UGX	空港の制限エリア
サモサ	2,000 UGX	空港の制限エリア外
同一商品	15,000 UGX	空港の制限エリア

このように、日本と比べて給料は大幅に少ないことがわかりました。また、サモサと呼ばれる伝統的な食事はとても安く買えました。ジュースは日本と比べて確かに安いですが、日本の給料との比を考えるとそこまで安くはないと感じました。

同じ商品の価格を場所ごとに比較すると、空港というウガンダの中でもお金を持っている人しか立ち入れないエリアでの物価は、そうでないエリアと比較して価格差が5倍から7倍程度と顕著であり、とても驚きました。ウガンダの空港で滞在する人の多くが、欧米人であると思われます。このことから、制限エリア内の商品は旅行者向けの販売がメインであること、またウガンダの多くの人たちは、まだ海外旅行に行けるほどの経済的余力はないのではないかと考えました。

(2) 農業（畜産）

ウガンダでは肉の生産量は増加しているが、一人当たりの消費量が伸びていないという現状があると伺いました。最初にこの事実を知ったときは、とても驚きました。通常、生産量が増加している場合は消費量も増加すると容易に考えられるからです。ウガンダでのこの状況の原因は、生産量と同等かそれ以上に人口が増加していることに所以すると伺いました。しかし、これだけに限らず、効率的に畜産を行っていないことも原因の一つであると考えました。それを裏付ける情報として、畜産の90%が遊牧という効率的ではない形態をとっていること、また500頭から600Lの牛乳を産生するという事実から、畜産が効率的に行われていないことが分かります（日本の通常の乳牛であれば1頭から30L程度は産生可能である）。またお話を伺い、口蹄疫、ブルセラ病、アフリカ豚熱、ニューカッスル病がウガンダの畜産の生産効率を下げていると考えられました。これらの疾病は、成長速度の低下や畜産物としての価値の低下に繋がります。その結果、畜産への

投資に対する効率も下がると考えられます。獣医の動物感染症学では、ニューカッスル病は日本においてはワクチンによって被害を抑えることに成功していると学びました。そのためウガンダの畜産には、ワクチンなどの感染症対策や、効率的で集約的な畜産に移行させるなど、改善の余地は十分にあると考えます。ウガンダの畜産にはポテンシャルがあります。将来的な食文化の欧米化の際に、自国で確保できるサプライチェーンとして、ウガンダの畜産は重要な役割を果たすだろうと考えました。

(3) 政治

ウガンダでは、過去数十年にわたって安定した政権運営が行われてきました。この事実は、国内総生産の年5%程度の成長率達成に貢献していると考えられます。このような長期政権は経済において大きな影響をもたらしていますが、自分は将来の懸念事項になるのではないかと考えています。その理由は大きく分けて2つあります。まず1つ目は、ここまでの長期政権が維持されたことから、今後も現状から変わらないことが容易に予想できるからです。そして2つ目は、ウガンダを含めたアフリカでは発生したクーデターの回数がとても多く、世界中で発生したクーデターのうちの半分を占めている（1950年以降、全世界で発生した492のクーデターのうち220がアフリカで起きている）からです。例として、現在のトップの死去などによって現体制に政治的な空白が生じた場合、長期政権がゆえに次世代の政治体制への信頼や執行能力の養生が十分でない状態が発生すると考えられます。この場合、クーデターが発生



するような不安定な状態になりますし、クーデターが発生した際に政権側が十分な対応をとることができないと考えます。このことから、現状の長期政権は将来的に政治的な不安定に陥る可能性をはらんでいると考えました。

日本と基盤的な部分から違っていたため、今回のウガンダ留学では深く考えたいと思える物事が多く、ウガンダの知識だけではなく、様々な物事についてまずは自分なりの考えを深めること、そして自分なりに情報を集めて仮説を確かめてみるという、一連の流れを実行する力が養成されたと思います。

最終発表の内容

最終発表では、日本の伝統的事故予防法である「指差し確認」について発表しました。日本人なら「指差し確認」と言われて大体の意味と方法などが分かると思います。しかし、他国では同様にいくとは限りません。今回この内容を取り扱ったことで、失敗を通して「文化」、「前提知識」、「言語」などの壁を感じるという、とても良い勉強の機会を意図せず得ることができました。

この「指差し確認」を取り扱ったきっかけは、エンテベ動物園における動物の脱走などの重大インシデントが起きていることを聞いたことです。このような事故は人を傷つけるだけでなく、人の命を奪いかねないほど危険なものです。そして、自分はウガンダで起こりうる将来的な悲劇を少しでも予防、もしくは損傷の程度を軽くできたらと思い、紹介しました。プレゼンでは、目的や科学的根拠や方法を紹介するだけでなく、一緒にやってみる機会も設けました。しかし結果は、ウガンダの人々に十分理解されなかったであろうというものでした。この結果は、最初に挙げたような「文化」「前提知識」「言語」の壁が原因であると考えました。まず「文化」ですが、ウガンダにはあまり危機管理を重視しないような文化が根底にあるように感じました。日本と比較して明らかに交通ルールを守る人の割合が低いことから、このような文化を持っているのではないかと思います。そのため、今回紹介した危機管理法である「指差し確認」に関する興味や関心が少ない、もしくは価値を感じにくかったのではないかと考えました。このことから、プレゼンの内容も十分に理解してもらえなかったのではないかと考えまし

た。続いて「前提知識」としては、ウガンダに存在しないような概念を、7分程度のプレゼンから十分に理解をしてもらおう、という試み自体がそもそも難しいものであったと思いました。「指差し確認」という自分がよくわかっている内容を、わからない人に伝えるためには、前提知識に関するより一層の配慮が必要だったと思います。またそれに加えて、今回プレゼンした対象が農学部の人たちであり、工学部の人たちだったらもう少し理解されたであろうという意見もいただきました。そのため、もう少しプレゼン相手についての情報を集める必要があったと思いました。最後に「言語」として、「指差し確認」の翻訳である pointing for confirmationが、そもそも英語として親しみやすいものではない、理解しやすいものではないということです。プレゼンを作る際に、英語話者の方とこの部分について1時間程度話し合いました。その程度には、理解に苦しい表現であったと思われる。このように、ただプレゼンを上手にできたというだけには止まらない、とても大きな学びのあった有意義なプレゼンの機会でした。そして今回の学びや失敗を、また次回の挑戦に生かしていきたいと思いました。



赤道をまたいでいるところ

プログラムを通して

農学部生命環境農学科2年 徳田文

1. 参加動機

私がこのプログラムに参加した理由は、アフリカに興味があったからである。また、プログラムの中に、JICAのネリカ米研究の拠点となっているウガンダの国立作物資源研究所（NaCRRI）を訪れる機会があり、実際に行ってみようと思ったからである。

私はこのプログラムを知るまで、自分に留学する機会があるとは思っていなかった。留学は主に語学の習得を目的として行くものだと考えていたからだ。しかし偶然、留学説明会のポスターを見てアフリカに行けることを知り、また現地の農業の様子を見に行ったりできるという内容から、自分も留学してみたいと思うようになった。英語が得意ではないし、将来海外で働きたい、という明確な意思があったわけでもなかったのに、自分が行って良いものかと参加を申し込むか迷っていたが、周りの人に背中を押してもらえたのもあり、思い切って申し込んだ。そうして、晴れてこのプログラムに参加できることになった。

2. ウガンダを訪れて

ウガンダに到着し、空港のあるエンテベから首都カンパラまで向かう道では、現地のTAとスタッフに直面し、緊張しながらも、農園の緑が広がっているのが印象的だったこと、ビクトリア湖を見て感動したことを覚えている。また高速道路があることが意外だった。町を走る車のほとんどは日本の中古車で、左側通行であることに親近感が湧いた。ウガンダの食べ物はどれもおいしかったが、なかでもパイナップルが甘くて本当においしかった。

カンパラの街は、自分の想像していた「発展途上国」よりも豊かで、開発が進んでいる印象を受けたが、道路はボダボダと呼ばれるバイクタクシーでごった返していたり、ショッピングモールの警備員がライフルを持っていたり、主食はマトケ、ポショ、カコ、米…と何種類もあったり、言語の壁があったり、ウガンダが異国の地で異文化であることは違いなかった。街には若い人が多く、明るい雰囲気でもとても活気があり、どんどん

人口が増えているということがよく分かった。機械化が進んでおらず、あらゆる作業が人力で行われていたが、機械を使わずとも人手がたくさんあるという感じだった。その様子を見て、昔の日本もこんな感じだったのかな、などと考えていた。

ウガンダで過ごした日々の中で一番印象に残っているのはウガンダ人の国民性についてである。留学期間中、私が関わったウガンダ人はみんな明るく、温厚で、親切な人ばかりだった。すれ違う人の多くは笑顔で挨拶をしてくれるし、バスに乗っていると町の人がこちらに向かって笑顔で手を振ってくれることもしばしばあった。そのたびに私は温かい気持ちになった。時間にルーズであるという国民性を感じることもあったけれど、ゆったりと時間が流れていく感覚がとても新鮮だった。一方で、ウガンダには激しい格差があることも知った。職を得るのが難しく、コネクションが重要だそう。大学を卒業しても職がなく、ボダボダ（バイクタクシー）のドライバーになるケースも少なくないと聞いた。そんな話を聞くと、実際に関わってくれていたウガンダ人の様子とはギャップがあると感じると同時に、私たちが見ている世界の狭さを感じた。私たちがプログラムで享受していたものは、ウガンダの豊かな部分だけだったのかもしれないし、私たちが外国人だったから良くなっていてくれたのかもしれない。それでも私は、ウガンダという国と明るくてお茶目なウガンダ人のことが大好きになった。



写真上：大学の食堂での昼食
写真下：大量のボダボダ

3. ウガンダの農業—NaCRRIを訪問して

国立作物資源研究所（NaCRRI）では、JICAが行うイネの研究、開発の様子を見ることができ、実際にネリカ米の播種から脱穀までの一連の作業を体験することができた。アフリカでのイネの研究がどんな場所で行われているのか想像もつかなかったので、実際に見ることができたのは本当に貴重な機会だった。

最も印象に残っているのは、NaCRRIで一連のレクチャーを受けた後、現地の農家さんを訪問したときのことだ。訪れたコメ農家さんでは、実際に田植えをする様子を見せていただいた。素早く、あっという間にイネの苗が植えられていった。その一方で、私たちはNaCRRIで苗を田んぼに定植する際は、風による倒伏を防ぐために、イネの上部をちぎり取り、草丈を低くすることを教わっていたのだが、現地の農家さんは草丈が高いまま植えていたためイネが倒伏してしまっていた。この点について私たちを案内してくれていた現地のリーダーに聞くと「私の指導が行き渡っていないのだ」と語っており、NaCRRIからリーダー、リーダーから農民へ、と適切な栽培方法を普及させていくことの難しさを感じた。また、定期的に間隔をとって植える条植えではなく、ランダム植えが行われており、まだまだコメの収量を上げることができるのではないかと、もったいなく感じた。



倒伏したイネ

それよりも印象的だったのは、現地の農家さんが現地語を喋り、それをリーダーが英語で通訳してくれていたことだ。マケレレ大学のTAやスタッフ同士が現地語で会話をする場面は見ていたが、彼らは英語も話すことができる。このような、街とは違う様子を目にし、教育の機会の格差が確かに存在するを感じた。私は現地の農民に「ネリカ米という新しいコメを栽培することに抵抗はなかったのか？」という質問をした。それに対する答えは「説明を受け、自分たちで納得しているから抵抗はなかった」というものだった。実際に行ってみて思ったのは、新しいコメの栽培に対する抵抗も何も、コメを栽培することでまず現金収入を増やし、生活水準を向上させるということが彼らにとって大切であるということだ。そして、国際協力というものや現地の農民の生活への私自身の解像度の低さを恥ずかしく思った。農業と国際協力について多くのことを学べた一日だった。

4. ウガンダの教育—2校のセカンダリースクールを訪問して

今回、私たちはGombe Secondary SchoolとKennedy Secondary Schoolという2つのセカンダリースクールを訪れた。Gombe Secondary Schoolはイスラム系の学校で、Kennedy Secondary Schoolはカトリック系の学校という違いがある。Gombe Secondary Schoolでは、協力隊の方の体育の授業を見学させていただいた。女子生徒と一緒にバレーボールをしたが、人数に対して明らかにボールの数が少なく、アンダーパスの練習でボールをあまり触れないまま授業が終わってしまっていた。また、図書館を見せて頂き



教科書が個人の所有物ではないことを知った。これらを通して教材が不足していること、いかに自分が恵まれた教育環境にいるのかが分かった。Kennedy Secondary Schoolでは、物理クラブと農業クラブの生徒が私に色々なことを教えてくれた。質問にもすぐにわかりやすく答えてくれて、感心した。自発的に楽しんで学んでいる印象を受けた。また、私たちを歓迎して歌と踊りを披露してくれたとき、スマートフォンで動画を撮影する私に、隣にいた生徒が「見ていていいよ」と言って私の代わりに動画を撮影してくれた。なんて気遣いができる中学生だろう、と感動した。

二つの学校に共通していたのは、生徒がとてもフレンドリーだということだ。学校の設備や環境は日本と全く異なっていたが、交流した生徒の楽しそうな笑い方は日本の中学生と同じで、自分の中学時代を思い出して少し懐かしくなった。



写真上：Kennedy Secondary Schoolにて
写真下：みんなでサッカー

5. プレゼンテーションについて

私はプレゼンテーションで、ウガンダ製のものをを買うことを推奨する取り組み、BUBU (=Buy Uganda Build Uganda) とBUBUのロゴマークについて紹介し、その取り組みを広めるための方法を提案した。BUBUはウガンダ政府が主導となり2017年から始めたものである。私がこのテーマを選んだきっかけは、マケレレ大学の授業内でBUBUが紹介され興味を持ったことである。また、実際にスーパーマーケットに行った際、どの商品がウガンダ製なのかわかりにくいと感じる

ことがあった。そんなとき、BUBUにロゴマークが存在することを知り、このマークを意識することがウガンダ製のものを選択し購買することの助けとなるのではないかと思ったのだ。

BUBUを推し進める具体的な方法としては、マークを意識しマークの付いた商品を買うこと、そしてSNSを通じBUBUの良さを発信すること、友達にBUBUの商品をプレゼントすることを挙げた。ウガンダ人は外国の製品に価値を感じるようだ。はじめこれを聞いたとき、ウガンダ人は外国のものなら何でも好きなのかと思っていたが、TAに聞いたところそうではなかった。まず食料はウガンダ人もウガンダ産のものを好んでいる。実際に毎日食べているものはほぼ100%ウガンダ産であった。ではなぜ外国のものに価値を置くのかというと、単純に外国のものの方が高品質な場合が多いからだそうだ。これを聞いてウガンダ人が外国の製品に価値を感じることに納得した。しかし、外国製品を買ってはなかなかウガンダの企業を大きくすることはできない。私はこのプレゼンを通して、まずはウガンダ国民自身が国産の商品を購入することで、ウガンダの企業を応援することが大切だということを伝えたい。そしてウガンダの企業を大きくすることが、ウガンダ製品の品質の向上や雇用の創出につながるのではないかと考えた。

このプレゼンテーションを通して、日本人は日本製のものを好むイメージがあるため、ウガンダ人が外国製のものに価値を置くという日本との違いを知った。また、時代背景の後押しもありつつ、資源の少ない日本で、人々が信頼できる品質の製品をつくり、企業を大きくした先人に感謝しようと思った。その一方で、日本は食料自給率が低い。毎回の食事のどれだけが輸入された食料だろうか。この点はウガンダに見習って国産のものを進んで食べるようにしたいと思った。



BUBUのロゴマークと、マークのある商品

6. プログラムで得たこと

このプログラムは私にたくさんの新しい考え方ももたらしてくれた。私にとってはこのウガンダが初めての海外だった。そのため、日本の外から日本がどう見えるのかという視点がまず新しかった。日本には良いところがたくさんある。モノは何でもあるし、インフラが整備され、安全で、安心感がある。一方で、心の幸福度合いはどうだろうか。ウガンダの明るい雰囲気の影響を受けて、ウガンダで私の心はどんどん元気になっていった。帰るころには、まだ日本に帰りたくないな、と思ったりもして私自身驚いた。そして何よりも、ウガンダで暮らす日本人の方々との交流によって、私も将来海外に出てみたい、という気持ちを持つようになった。ウガンダではJICAの方や海外協力隊員の方、日本国大使館の方をはじめとして、本当に多くの日本人の方々にお世話になった。実際に大変なこと、悩み、葛藤、喜びなど、様々なお話を聞かせていただけたことで、海外で活躍することの魅力に気づくことができた。

一緒にウガンダに来たメンバーや先生方、TAたちと話す時間もかけがえのないものだった。他のメンバーは私が気づかなかったことに気づいたり、考えていたり、将来の見通しを持っていたり、前向きなエネルギーを持っていたり、尊敬できるところがたくさんあって、私自身とても良い影響を受けた。先生方は等身大の私たちを優しく温かく見守り、サポートしてくださった。TAは授業やそれ以外のことで、わからないことがあった時に何でも教えてくれた。また、本来は私たちがウガンダについて理解しようとするべきところなのに、それ以上の積極性をもって日本のことについて理解しようとしてくれて、それがとても嬉しかった。私の目標であり追いつきたい人たちだ。

ウガンダに対して着いたばかりのはじめの頃は、自分の想像していた「発展途上国」よりも豊かで、開発が進んでいる印象を受けていた。しかし実際に過ごしていく中で、整っていない道路や激しい交通渋滞、ゴミの処理方法、大気汚染、教育格差、感染症など、ウガンダの抱える様々な課題を目の当たりにした。また、少し街を離れると頭に水の入ったポリタンクを乗せて運ぶ人も多く見かけた。以前の私なら、仕方がないことだと他人事のように思っていたかもしれない。けれども

ウガンダでの3週間以上にわたる生活やプレゼンテーションを通して、そのような課題がなぜ解決しないのか、解決するための行動を起こしているのか、を自分で考えるようになり、ときには支援を受けることを前提とする姿勢を批判的に考えるようにもなっていた。これがこのプログラムで私が成長できた点だと思う。これから私に何ができるだろうか。まずはもっと英語も大学の授業も頑張ろう。そしていつか、世界のどこかの人の役に立てる人間になりたい。

7. 最後に

本当に充実した26日間で、たくさんのことを学ぶことができた。引率して下さった蕪木先生をはじめとし、Cosmasさん、明るく活発なメンバーたち、マケレレ大学の方々、関わってくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。このような貴重な経験ができたことへの感謝を忘れず、これからは生かしていきたい。

ウガンダ実践教育プログラムを通して

工学部電気情報系学科2年 上田知也

1. 参加動機

私がこのプログラムに興味を持ち始めたのは、去年の夏にメキシコのプログラムに参加してからである。もともと、こういった留学のプログラムには語学力向上を目的に参加していたが、メキシコのプログラムに参加してから意識が変わり、語学力向上のためだけでなく、ウガンダなどのいわゆる「発展途上国」で自分たちに何が出来るかを考えるために参加したいと思うようになっていった。

とはいっても、私自身ただの大学生であるので、国規模の政策などといった大それたことをするのではなく、自分のような一人の地球人としてできることはないか模索することが、参加に踏み切った理由である。また、私自身は農学部ではなく工学部であるので、少しでも何か工学的な観点から取り組むことが出来る問題がないかどうか模索することも目的としていた。



2. ウガンダの学校と教育

ウガンダの教育は、実際に現地へ赴くと元々抱いていたイメージよりは充実しているものであったが、問題点も多くあるように思えた。今回のプログラムでは、Gombe Secondary SchoolとKennedy Secondary Schoolの2つのセカンダリースクールに、そしてマケレレ大学と併せて3つの教育機関に訪問した。セカンダリースクールとは、日本でいうところの中学校のようなものであるが、年齢は必ずしも学年で同じというわけではなく、幅広い年齢層の生徒たちがいた。年齢層が一定ではない理由としては、学費がかなり高いため、次の学年に進級する前に学費を稼ぎに行く人たちが多くからだそう。また、どちらも全寮制の学校であり、校内に男女別れた寮が存在していたが、男子寮と女子寮で明らかに設備の充実度と清潔感が違うことに違和感を覚えた。

授業内容に関しては、生徒は図書館にある教科書を授業のたびに取りに行き使うというスタイルであり、放課後に自主学習をしにくい環境が、学生にとってはしんどいのではないかと感じた。また、教科書をいくつか軽く見たが、事前に聞いていた通り授業進捗がかなり速く、日本の中学生がやっている内容よりも高度な内容も多く含まれていた。高度な内容を学ぶことはとても大事であるが、進捗が速すぎるが故に基礎が疎かになってしまい、授業についていけなくなる生徒もいるのではないかと心配もあった。

その他にも非常に興味深かったのが、セカンダリースクールのパソコン授業である。日本において中学生が受けるパソコン授業、所謂「情報」という授業はタイピングの練習であったり、Excelの使い方といったものが多いが、ウガンダではパ

ソコンの修理方法など、大学の工学部でやるような内容をしていた。日本でいう授業よりも高度かつ実用的であることに感心した。

3. ウガンダの医療

プログラム期間中に体調を崩してしまい、実際に病院に行く機会があったので、その際に感じたことを書いていこうと思う。医療という観点において自分がウガンダに対して抱いていたイメージは、医療費が非常に高額で質があまり伴っていないというものであったが、実際に行ってみると診察料は約3800円とそこまで高額な訳ではなく、設備も旧式ではあるが日本で見かけるようなものもあった。ただ、従業員の数が多すぎるのに対して医師の数が著しく少ないとは感じた。病院に来る患者さんがかなりの人数にも関わらず、医師が少ないため回転率が非常に悪く、診察されるまでに数時間待つことが普通であった。また、如何せん設備が古いので、重大な疾患に対する検査は出来ても、細かく病原菌を特定できるわけではないため、そこが問題であると感じた。

先ほど「約3800円とそこまで高額ではない」と書いたが、これはあくまで日本人の収入に基づく金銭感覚によるものであり、ウガンダの金銭感覚で考えるとかなりの高額であることに注意しなければならない。実際、病院にはヨーロッパ系の白人の方がウガンダ人よりも多かったため、医療費が高額であるという問題はある程度事実であると推測できる。

4. ウガンダの食事

ウガンダにおいて、現地の方々の主食として「マトケ」がある。マトケとは、緑色のまだ熟していない状態のバナナの果実を蒸して潰したものであり、日本でいうところのお米のような位置づけの食べ物である。マトケ自体に味はほぼないため、落花生やヤギ肉、牛肉といったものからできたソースをかけて食べる人が多い。他にも「ポショ」とよばれるものもあり、これもマトケと同じく米ポジションの食べ物である。ポショというのは、トウモロコシの糖分と水分でできた胚乳を使い、お湯と混ぜ合わせることで出来るものだ。こちらも味がほぼしないため、豆からできたスープなどをかけて食べる。また、アイリッシュポテトやフライドチキンといった、日本でも食べるこ

とが出来るようなものが学食で出ることも多く、日本食との違いで食事に困るといったことはそこまでなかった。



アイリッシュポテトとフライドチキン

5. プレゼンテーションの内容

私が最終プレゼンでテーマとしたものは「ウガンダにおけるゴミ問題」である。ウガンダに限ったことではないが、今日世界ではゴミ問題が非常に大きな課題となっている。特にウガンダのような発展途上国においては大きな課題となっており、今回の滞在中も、道端に多数のゴミが落ちていたり、人の身長の数倍はあると思われるゴミ山が中学校の裏にあたりするのをよく見かけた。私はこの「中学校」という点に着目した。大人が道端にゴミを捨てるということは、当然いけないことではあるが、悲しいことによく見かける。すなわち、彼らはポイ捨てという行為が普通になってしまっているのだ。しかし、中学校の時点でポイ捨てが当たり前と感じてしまっているのは、非常に良くない状態だと感じた。小さい頃から当たり前と感じているからこそ、大人になってからもその異常性に気づくことなく、日々を過ごしてしまうのではないかと考えたからだ。

そこで私が提案したのは、「小学校から大学までの教育機関においてゴミ拾いの日を設ける」というものだ。ゴミ拾いを行うことが、ゴミ問題の解決に有効である理由は3つある。

1つ目は、「ポイ捨てを減らすことができる」である。理由としては、普段からポイ捨てをしていると、ゴミ拾いの日に大量のごみを拾わなければならないになってしまうため、それを防ぐために多くの人は「普段からポイ捨てをしなければゴミ拾いの日の負担を減らすことができる」ということに気づくことができると思うからだ。大半の人は、ゴミ拾いに時間を多く費やしたくないと思うので、効果的であると予想できる。

2つ目は、「ゴミ問題に対する意識を向上させることができる」である。小さいころに経験したことは、後の人格形成に大きな影響を与えることが多い。すなわち、小学校や中学校といった頃からゴミ拾いをする中で、大人になった際にそういった経験をしてこなかった人たちよりもゴミ問題に対する意識が高くなり、結果としてポイ捨てを減らすことができる傾向があると考えた。

3つ目は、「割れ窓理論による治安向上」である。割れ窓理論というのは、環境犯罪学によるもので、軽微な犯罪を徹底的に取り締まることで、重大な犯罪を未然に防ぐことができる、という考え方である。例えば、ゴミが大量に捨てられている建物があるとする。たとえそこに人が住んでいるように、周りから見るとその建物は「管理がそこまでされていない建物」と思われることになる。すると、その建物なら多少法律を破ってもいいのではないかという感情が人の中に出てくるようになってしまう。しかし、逆にゴミ一つない綺麗な建物だと、人は「その状態（綺麗な状態）を維持しよう」と考える傾向があるのだ。したがって、私が言いたいのは、ポイ捨てという軽微な犯罪をなくすことで、重大犯罪を減らし、結果としてウガンダ全体の治安向上を図ることができるということである。

これらの理由から、私は先ほど言ったような提案をした。また、実際に日本で行われているゴミ拾い活動では、以下の図1に示すように年々開催される場所が増えており、それに伴い参加人数もどんどん増えている傾向にあることが分かる。



図：ゴミ拾い活動への参加人数と開催数の推移

結論として私は、小学校から大学にかけてゴミ拾いをする日を設けることで、ウガンダにおけるゴミ問題解決と治安向上を同時に図ることができると考えた。

6. 最後に

最後に、今回のプログラムに携わってくださった先生方、マケレレ大学のTAの方々、ドライバーさん、そして一緒にプログラムに参加した仲間、全ての方に感謝申し上げます。このプログラムで得た経験を今後に生かしていき、将来世界で活躍するグローバル人材になりたいと思います。改めて、今回は本当にありがとうございました。

プログラム事後報告

農学部生命環境農学科2年 尾崎舜作

1 志望動機

僕は以前からアフリカや東南アジアなどの発展途上国に興味がありました。それは、中学生の時に読んだ「バッタを倒しにアフリカへ」という前野ウルド浩太郎さんの本を読んで、楽しそうな雰囲気やこの人の生き方に憧れて、以前から興味がありました。また、高校生の時にマレーシアでの海外ボランティアに二度参加した中で、短期間でしたが海外で生活することや、日本やアメリカ、ヨーロッパなどとは違うあの独特の雰囲気が好きで、「マレーシアでこんなに面白いなら、アフリカはもっと面白そう」と思っていてアフリカに興味がありました。

大学に入るまではこの漠然としたイメージが頭の中にあり、鳥取大学農学部に進学しました。1, 2年生の時は、コロナウイルスの影響もあり海外に行くことができず、いつの間にか発展途上国への興味が薄れ、大学の授業がおろそかになっていました。ですが、だんだんとコロナウイルスでの規制が緩和されてきた今年の夏、タイに旅行に行った際にやっぱり面白いなと思い、大学在学中にアフリカへ行きたいと思っていました。国際乾燥地農学コースでは、アフリカの農業についても少し学んでいて、個人的にもアフリカに興味がある中で「一度アフリカに行ってみて、雰囲気を体験してみたい」という漠然とした気持ちがありました。大学のプログラムでアフリカに行けることを知り、応募したというのがおおまかな志望動機です。そしてアフリカにただ行くのではなく、アフリカに行って学びたい、経験したい目標が二つありました。

一つ目は「アフリカの雰囲気を知る」ということです。これはこのプログラムの事前研修で目標を発表した時、抽象的な目標ではなく具体的なものと言われていましたが、事前研修ではあえて具体的なことを発表しませんでした。僕の中でこの「アフリカの雰囲気」というのは、一か月弱生活してみてどう感じるか自分を試してみたくて、例えば食べ物や、気候、文化、宗教、国民性など日本とは大きな違いがある中で単純に「アフリカで生活してみても楽しいのか」という観点で自分に合っているか確認したかったというのがありました。

また、もう一つ自分の目で確認してみたかったことがあり、それは「貧困の現場を見たい」というのがありました。「貧困を見たい」と言うのは、不謹慎というか、リスペクトにかけているというか、マイナスのイメージだったので、みんなの前で発表しませんでした。なぜ僕が「貧困の現場を見たい」と思ったかという、将来国際協力に関わる仕事をしたいと思っている中で「なぜ日本で生まれた関係ない自分が外国の人を助けるのか？」というモヤモヤがずっとあったからです。高校の時にマレーシアでの海外ボランティアに参加し、学校に行くことができない孤児を保護し支援しているcffマレーシアの安部光彦さんに、なぜこういう活動をしているのか聞きました。「海外協力隊で活動中、ストリートチルドレンに出会ったとき、言葉が通じず、孤独な子の目を見て、キラキラしていて、この命を助けたいと思い今の活動をしている」と聞いて感動したし、カッコいいなと憧れを持ちました。自分も覚悟を



持つにはこのような経験をしないといけないとあって、最初からそれを目標にするのは変だし、間違っているかもしれないけれど、自分は「心の底からこの子たちを助けたい」と決意できる何か、それは貧困の現場に限らず、とにかく現地を見ることでした。そのため、一つ目の「アフリカの雰囲気を知る」という目標を設定しました。

二つ目の目標は「農業の実態を知る」というものです。これは大学の講義だけでは学ぶことができないことを学びたかったからです。何が問題で何を解決していくべきか、3週間では学ぶことはできないかもしれないけれど、それができなかった場合、例えば国民性が合っていないなどの現地でしか学べない現状を知りたいというのがありました。また、半年後に研究室分属があり、なにを研究したいかを探すということも含めて「農業の実態を知る」という目標がありました。これらの理由が志望動機です。

学んだこと

2/22のNaCRRI訪問では、イネの播種、収穫、脱穀の体験をしました。このウガンダ海外実践プログラムに参加する前は、ネリカ米について事前学習で少し学んだ程度であり知りませんでした。ウガンダで学んだことの一つはネリカ米です。そもそもこのプログラムに行く前までは聞いたこともなかったのですが、アフリカで貧困解決のために高収量のアジアイネと病気や雑草に強いアフリカイネを交配し、お金になる作物として開発され、実際にJICAが普及活動をしているということを今回実際に行ってみて知りました。今まではイネについて全く興味がなかったのですが、ネリカ米に興味を沸き、日本でも栽培してみようと思いました。NaCRRIでもらったRice Cultivation Handbookを翻訳してみると、ネリカ米を栽培する際の播種から除草、収穫までの方法が記載されており、日本では気候や土壌の状態などの違いがあるものの、シンプルに興味をわいたので一度やってみようと思いました。ネリカ米についての知識、例えば播種の際30cmに約20個の種をまくということや横のイネとは30cm間隔をあけるということ、種の選別方法、除草の最適な時期と回数、品種によって収穫までの時期や収量、病気に対する強さが違うことなど、もらったハンドブックには他にも栽培についての注意点など様々なことが書いてありました。専門的な知識を少しではあるが知ることができたと思います。日本で生活していると、そもそもネリカ米について知る機会もなかったし、これらの知



識を調べようともしかったと思うので、僕にとって実際にアフリカに行ってネリカ米に出会えたことはとても大きな学びとなりました。

学んだことの二つ目は自分がしたい国際協力についてです。僕は以前まで国際協力は善意で貧困の人たちを助けたいという一心で動いているものだと思っていました。しかし実際には、貧困解決などの善意の気持ちはもちろんあるものの、国の利益のためにもやっているということを知りました。これは普通に考えて当たり前のことであるし、だからこそJICAのように国の機関として大規模に支援できているんだと思いました。

カンパラで3週間生活してみて、カンパラはウガンダの首都なので、生死の間をさまようレベルの貧困の方を見るような機会はなく、みんな楽しそうに生活しているなどという感想を持ちました。僕が以前まで思っていた国際協力というのは、貧困が原因で死にそうになっている人たちを助けるものだと思っていたし、僕自身助けたいと思っているので国際協力に魅力を感じていました。今回、現地の方々と交流する中でいろいろな話を聞く機会があり「ウガンダでの生活は楽しいですか？現状に満足していますか？」と計20人以上に質問しました。政府への不満などがあるという人もいましたが、全員が「楽しい」と答えていました。これを聞いて、この人たちは今でも楽しい生活しているし、この人たちを支援する国際協力というものは本当に正しいのかという疑問が生まれ

ました。現在日本はウガンダに比べると生活水準は高く、僕がカンパラで見た人々にとって、支援されることで生活は楽になると思います。しかし仮にウガンダが日本のような水準で生活するようになって、本当に幸せになるのかという疑問があり、支援をして無責任に生活を変えるのはアフリカにある独自の文化を壊すことにもなるし、日本のように自殺率が高くなり、それが必ずしも幸せには繋がらないんだろうなと感じました。実際には見ていないですが、ウガンダの北東部の貧困地帯や、アフリカにかかわらず世界には明日生きていける保証がなく死に直面している人々がいると思います。きれいごとかもしれないけど、僕はそういう人たちを助けたいんだなと思いました。もちろん自分は日本が好きだし、国際協力として今後の日本の利益を追求していくことは素晴らしいことだと思います。現在僕はJICA以外に国際協力の活動をしている団体を知りませんが、自分がやりたいことが100%JICAに入れてもできないかもしれないと思いました。だから、今後もっとそういう活動について調べていこうと思いました。これは大使館に行ったときに福澤大使から話を聞いた時に思ったことで、これも実際にウガンダに行かない限り感じられないことだったと思います。自分がしたい国際協力というものがあったということが、ウガンダで得たことの一つだったと思います。

学んだことのもう一つに、海外の人と接する中での価値観の違いがあります。マケレレ大学の事務員の方でジョアンさんという人がいて、その方は僕たち日本人ととても仲良くしてくれて、いろいろなことを通訳したりしながら教えてくれました。その方と接している中で僕は、日本ではジョーダンとして通じるけれど、あまりいいことではない失礼なことをしてしまいました。ジョアンさんは機嫌が悪くなり、蕪木先生からも「海外ではそういうことは面白いことではないし、良くないことだ」と教えてもらいました。今までに何回か海外に行ったことはあったけど、同じ海外の人とずっといることもなく、今回してしまったような行為もしたことがなかったので、相手に失礼になっていると気づくことができませんでした。しかし、今回そのような行為が日本では許されても海外では許されないということを身をもって実感し



ました。将来的に海外で働きたいという気持ちがあるので、仕事をするようになってからではなく、今の大学生のうちに気付くことができよかったです。

最終発表の内容

ウガンダで3週間生活した中で、問題だと思ったことは大気汚染についてです。カンパラで生活することが多かったのですが、活動帰りの5、6時にカンパラの街をバスから見ていると、空気がとても汚く見えました。ここからウガンダが経済発展していき人口も増えていく中で、大気汚染の対策を今以上に行わないと人体への悪影響が大きくなり、若くして亡くなる人が増えると思い、大気汚染は大きな問題であると考えました。実際ウガンダは世界で17番目に大気汚染が進んでいると言われていて、大気汚染による早すぎる死は、経済にとっても大きな損害を引き起こします。長い目で見ると、今から対策していかなければならないことだと思いました。そこで今回は、国や企業などの団体ではなく、個人で今からでも実施していくことができる対策を二つ提案しました。

一つ目は公共交通機関の使用です。ウガンダでは公共交通機関が発達しておらず、公共交通機関の利用は難しいです。しかし、誰もがこの大気汚染問題への対策としてできることは、自転車の使用と乗り合いタクシーの使用です。しかしプレゼン発表後の質疑応答の時間に、今のカンパラの道路状態で自転車の使用は危険すぎるという返答をもらいました。次に乗り合いタクシーの利用ですが、乗合タクシーは最大で14人の人を乗せることができます。それに比べてボダボダと呼ばれるバイクタクシーは、基本的に一人しか乗せることができません。単純計算で、14人の移動に、乗り合いタクシーなら一台で賄うことができます。本来、バイクの燃費効率は自動車よりも2倍高く、二酸化炭素の排出量もはるかに少ないのですが、バイク14台と車1台を1マイル単位で比較すると、バイクの方が10倍大気を汚染することが分かっています。もちろん、ウガンダで使用されている乗り合いタクシーは型が古く、二酸化炭素排出量も多いのですが、それでも、バイク14台よりも乗り合いタクシー1台の方が環境に優しいです。日々の生活の中でボダボダを使用するのではなく、乗り合いタクシーを使用することを心がけ

るのは、今日からでも始められることだし難しいことではないと思ったので、この対策を提案しました。

二つ目の対策は、木炭や木を燃やし料理をするのではなく、ガスを使用するということです。ウガンダではご飯を作るとき、多くの家庭がガスや電気ではなく木や炭を燃やして料理しています。ガスが導入されていない家庭にガスを導入することはコストが大きく、特にカンパラ以外の地域での導入は現実的には難しいとは思っているので、比較的金銭に余裕のある人達に対しての対策案にはなってしまいます。しかし、大気汚染問題という大きな問題を解決するためには国単位で対策を講じる必要がある一方、僕が提案したような一人ひとりの取り組みというのが非常に重要になってくると感じています。また、この問題について調べていく中で、自分自身ももっと個人でできることへの意識を高めていく必要があるなと思いました。またみんなの発表を聞いて、こんな問題があるんだなと思うことがあったので、できることは実践していこうと思いました。

僕は今まで人前で発表をした経験が少なかったし、それに加えて英語で発表するという事は初めてでした。リハーサルの際は全く上手くできずリハーサルの後に10回以上練習して、本番では後悔なくやりきることができました。日本で大学生活をしていてなかなか無い経験だったので、前日は嫌だったのですが、終わってみて、今後自分が仕事をしたり将来海外で働く際にも役立つ経験ができたなと思いました。



ウガンダ海外実践教育プログラム

農学部生命環境農学科2年 岡本大翔

1. 研修参加の動機

私は高校生のときから国際協力の仕事に興味があり、発展途上国における農業の研究をするために鳥取大学に入学した。高校生のときの私には、途上国の人々は先進国の人と比べて貧しく不幸な人が多いというイメージがあり、より良い生活をしてほしい、しっかり食べて楽しく幸せに生きてほしいと願っていた。これが途上国に貢献したいと思う理由だった。しかし、途上国に行ったことになれば現地の知り合いもいない自分が、なぜ途上国の人々の気持ちを決めつけているのか、何を大きなことを言っているのか、とふと思い、恥ずかしくなったことを覚えている。国際協力を簡単に口にしたことは私のエゴであり、理想論でしかなかったと気がついた。それでも、私は途上国の農業の研究をしたいと思っていた。そこでまずは発展途上国とはどんなところか、どんなものを食べてどんな文化を持った人々がいるのかを知りたいと思い、この研修に参加することを決めた。ウガンダは土地や気候に恵まれた国だがGDPは未だに低く、発展途上国として知られている。人口増加率も甚だしく、安定した食糧供給が喫緊の課題となっている。しかし前述の通り、農業に優れた土地は多く、農業分野のポテンシャルは高いため発展が大いに期待できる。本研修では、途上国の人々について知り、国際協力の現場を自分の目で見た上で、私たちができることは何なのか、人々が何を望んでいるのかを見つけたいと思った。

2. ウガンダを訪れて感じたこと

ウガンダに行く前は、初めてのアフリカへの不安が大きかった。スーツケースには大量の薬と水を入れて飛行機に乗った。ウガンダに着いた時まず感じたことは、意外にも想像通りのウガンダだなということ。自然が豊かで暑い。大気汚染がひどくて、道路はガタガタ、水は不衛生。日本人にとって不便なことがたくさんあり、「これがアフリカか」と不安が増した一方で、これからのウガンダ生活への期待で胸が弾んでいた。そんな中で一番驚いたことはウガンダ人の陽気さだった。



ウガンダでは日本とは違い、身近に経済的な格差を感じられる。都市部のショッピングモールには高級な店も多く、お金持ちがたくさん訪れるが、歩いていける距離で少し離れるとスラム街のような家が並び、水道や電気が通っていない家も見受けられた。しかしながら、ウガンダには、明るくてすぐに仲良くなれる陽気な性格の人が多く、話すのが非常に楽しかった。お金持ちの人も路上で物売りの子供たちも関係なく、フレンドリーな人が多く、皆が楽しそうに生活しているのが印象的だった。自分の中の途上国の人々のイメージが大きく変わった。この人たちと一緒に、今ある問題を考えたい。つまり、異なる環境で生きている人々の生活や考えを知らないまま、遠い日本で国際協力をするのではなく、現地の人たちと共に生活して、共により良い生活を目指していきたいと感じるようになった。



排水垂れ流しの横にあるマーケット

3. ウガンダでの気づきと学び

今回の研修では、マケレレ大学での授業が複数回実施された。主にウガンダの教育、農業、経済、自然保護などについての授業であった。授業を受けるなかで何度も取り上げられたのが、植民地の過去である。ウガンダはイギリスの植民地時

代に言語が統一されたり、主要作物が変わったりと、影響を大きく受けていることを知った。植民地による影響には言語の統一などの良い面や、文化の軽視などの悪い面があるが、植民地がウガンダにとって一つのターニングポイントになっているということ、ウガンダの人々はかなり意識しているなど感じた。また、授業中に気づいたのは、自分の知識と関心の無さである。授業中に何か質問があるかと問われたとき、ほとんどの場面で何も質問が浮かばなかった。授業が一番真剣に聞いているつもりでいたのに、質問が思い浮かばなかった。それほど授業内容に普段関心がないのだな、と自分の無関心さを痛感した。日本でも授業を聞いた後質問をすることはなく、テストを頑張っているだけ。事実だけを覚える勉強ではなくて、なぜそうなるのか、他と比べてどうなのかなどを考えられるようになりたいと思った。



マケレレ大学での講義の様子

今回の研修ではJICAの活動現場を見学した。NaCRRRIはそのひとつである。NaCRRRIは国立作物資源研究所であり、そこでは日本の専門家たちが、米振興プロジェクトを行っている。ウガンダで新たなコメ(ネリカ米)を普及させようというプロジェクトである。そこでは、出穂前のイネと収穫直前のイネが同じところにあるという日本人からすると不思議な光景があって面白かった。ウガンダではコメはお金になる上、調理が簡単なことから需要が上がっている。しかしその普及率は低いという。これからの人口増加への対応策として、この米振興プロジェクトは多いに寄与できると感じた。プロジェクトの難しい点は普及活動にあると感じた。それまで違う作物を育てていた農家が育てる作物を変える

というのは、大きな決断であると思う。また、現地の人々は必ずしも英語を話せるわけではないし、話をまともに聞いてくれるとは限らない。そんななかで普及活動をする難しさを感じた。実際に普及活動をする宮本専門家は、「農家の人が話を聞いてくれることは少ない」と言う。あきらめずに話を続けることで、現地の農家の方々と共に続けていくことが大切だと感じた。JICA専門家の現場は想像以上に地道な作業だと驚いたが、この活動こそが草の根レベルでの支援に繋がっているのだなと肌で感じる事ができた。



NaCRRRIでのコメ栽培普及指導。左は吉野専門家

また、私がウガンダで1か月弱生活していて、一番改善すべきだと思ったのが交通インフラである。ガタガタな道、大量のボダボダによって都市部では毎日のように渋滞が起きていた。この状態では、必要な物資や救急患者などを早急に運ぶことができない。また、せっかく育てた農作物もトラックから落ちてしまう。また、交通量が多いことや渋滞は排気ガスを多く排出し、大気汚染の原因にもなる。しかし、道路の舗装が難しいことも理解できる。政府の費用負担には限界があり、そこまで手が回っていないのだろう。しかし、経済発展が進む中で、道路の舗装や維持などの交通インフラ整備は必要不可欠であると考える。



ボダボダによる渋滞

4.最終プレゼンテーション

私は最終プレゼンテーションで、ビクトリア湖の外来種問題について発表した。ビクトリア湖はウガンダ、ケニア、タンザニアにまたがるアフリカ最大の湖で、周辺住民の生活用水として大きな役割を果たしている。



ビクトリア湖

そんなビクトリア湖は現在、持ち込まれたナイルパーチという外来種によって深刻な問題が引き起こされている。最終プレゼンでこの問題を取り上げようと思ったのは、ナイルパーチが日本にも輸入されているからである。私たち日本人もこの問題と関わっている。かつ日本でも、琵琶湖のブラックバスのように同じ問題を抱えているため、我々が考えるべき問題であると感じた。

ビクトリア湖は元々、400種以上の固有種が棲息するほど生物多様性に長けた湖であった。しかしイギリスの植民地以降、繰り返される乱獲により、漁獲量が極端に減った時期があった。その解決策としてビクトリア湖にナイルパーチが放流された。ナイルパーチは大きく、成長が早いいため、お金になる魚として漁師が儲かったため、経済的に成功したように見えた。しかし、ナイルパーチは肉食、他の固有種は草食だった。そのため、固有種が一気に減り、さらに草食の魚が減ることで藻が増え続け、湖が酸欠状態になった。さらに酸欠の影響で魚の数が減る、という悪循環が起こった。ナイルパーチは多くの魚を食べる必要があるため、魚の数が減った今、ナイルパーチの数も減少していると言われている。また、湖周辺の人口増加による環境問題も起こっている。湖周辺の人々は農業に従事している人が多い。さらに、ウガンダ特有の集中的な降雨が重なり、生活排水や農業肥料が湖に流れてしまう。これが湖の富栄養化に繋がり、水草であるホテイアオイが極端に増える。これは、ホテイアオイが水中の栄養素を吸収して増えるためである。ホテイアオイの異常増

殖を引き起こしたり、漁師のボート進行を邪魔するだけでなく、マラリア蚊の生息地になったり、コレラ菌を媒介したりするため、人への健康被害の原因にもなりうる。



ビクトリア湖のホテイアオイ

そこで私は、この増えすぎたホテイアオイを再利用することにより、生態系を安定させ、湖の水質を改善し、元のビクトリア湖に少しでも近づける提案をした。私は湖周辺の住民が農業をしているというところを、逆に活かしたいと考えた。ホテイアオイは水中の栄養素を吸収するため、農業に必要な窒素やリン、カリウムを豊富に含む。よって農業肥料に適した植物であるといえる。そこで、増えすぎたホテイアオイを回収し、肥料として再利用することにより、農家の収量増が期待できるのではないかと考えた。しかし、ホテイアオイは含水率が高いため、効率的に乾燥させて肥料にするには高度な技術が必要である。最近では、実際にホテイアオイを堆肥にするための研究が進められ、琵琶湖でも水草を肥料化するプロジェクトが進められている。周辺住民が簡単にできるような解決策ではないが、この技術をビクトリア湖周辺にも持ち込み、その事業に周辺住民が参加することで、住民の収入が増えるだけでなく、その堆肥をウガンダで利用することで、ウガンダ国内の農家の収量増が期待できる上、湖の環境問題の解決に近づけよう。

さらに私は、湖自体を農地にする方法を提案した。ビクトリア湖が栄養過多になってしまっていることを利用する方法である。具体的にはホテイアオイなどの水草を除いた後に敷き詰め、その上に湖底の土を盛ることで浮島を作り、それを畑にしてしまうという方法だ。これは湖の豊富な栄養を利用でき、収量増が期待できるほか、ホテイアオイの再利用、農地面積の増加、環境教育・観光産業の場としても活用が期待できる。また、この農法はメキシコにおいて、アステカ帝国以前から

行われているため、ホテアオイの肥料化とは違い、知識さえあればウガンダ人でも実行可能だと考えた。



ホテアオイの肥料



メキシコの子ナンパ

5.これからについて

今回の研修では、ウガンダの表面上のことしか知ることができず、全てを理解できなかった。しかし来る前よりも、ウガンダや他のアフリカ諸国についてももっと知りたい、と思うようになった。今回行けなかったウガンダの田舎の生活や、難民の生活も見てみたい。何よりも、国際協力の生の現場で活動してみたいと思うようになったのが、今回の研修での大きな変化だった。しかし、現実的には国際協力の現場は難しいということもわかった。異なる環境、文化、言語の壁があり、多様な価値観を受け入れるだけの知識も必要になる。何よりも、日本人として日本のことをもっと理解する必要があるなど感じた。今の自分にはそのような知識だけでなく、コミュニケーション力や専門性も足りていないと感じる。どんな相手でも自分の言いたいことを伝えられるようになりたい。そのために、まずは英語でのリスニング、リーディングの力だけでなく、自分で話す力も同時

に養っていきたい。また、農学部での自分の専門性を高め、自分にしかできない何かを持てるようになるために、鳥取大学での勉強や研究を頑張りたい。

6.さいごに

今回の研修は多くの方々のサポートの元、無事終わることができました。この研修に関わってくださった皆様、本当にありがとうございました。今回たくさんの方々とお会えたことを大変うれしく思います。出会ったすべての方が素晴らしくたくさん刺激をもらいました。また、一緒に参加した鳥取大学のメンバーにも感謝しています。お互いにわからないことや辛いことが多い中、助け合って楽しく研修を終えることができました。メンバーの半分以上が病院送りになったときは本当に心配で仕方なかったですが、今となってはそれも楽しい思い出で、みんなは戦友です。本当にありがとうございました。また、研修の初日から最終日までずっと引率してくださった蕪木先生、本当にありがとうございました。

